

【紀要委員会企画】

〔委員会等活動報告〕

聖隷クリストファー大学看護学部における
国際交流事業への取り組み
—アメリカ看護研修に参加する学生の“activeness”をはぐくむ活動と課題—

樺澤 三奈子 炭谷 正太郎 渥美 陽子 小出 扶美子
仲村 秀子 成松 美枝 鶴田 恵子

聖隷クリストファー大学 国際交流センター運営会議 看護学部構成員

International Exchange Programs for Nursing Students
at Seirei Christopher University

—An Activity Report of a Nursing Study Trip to the U.S.
with Pre- and Post-Assignments to Foster Students’ “Activeness”—

Minako Kabasawa, Shotaro Sumitani, Yoko Atsumi, Fumiko Koide,
Hideko Nakamura, Mie Narimatsu, Keiko Tsuruta

Nursing Faculty Members of the International Exchange Committee at Seirei Christopher University

《抄録》

本稿では、本学看護学部が取り組む国際交流事業の一つ、アメリカ看護研修について、2015年度に行われた研修運営の実際と参加者の反応を概説し、参加者の“activeness”をはぐくむ活動を振り返り、今後の研修運営に向けた課題について検討した。短期的な課題としては、チーム形成の促進、現地研修への適応の促進、気づきを学びに繋げる支援であり、2016年度の研修運営に対策を盛り込んだ。長期的な課題としては、大学教育においてより魅力的で、参加者の“activeness”をはぐくむ効果があり、海外留学奨学金の受給を可能にするような研修へと、質の改善を図ることであり、そのための研修による効果をどのように評価するか、評価の時期や内容についての見直しの必要性が示唆された。

《キーワード》

国際交流事業、海外看護研修、activeness

I. はじめに

近年の情報化の進展を背景に、わが国では、大学教育の国際化のための構造転換が求められている（文部科学省、2013）。大学の国際化に伴い、多様な言語や文化等の背景をもつ学生がともに学ぶことにより、開かれた交流から生まれる知的発見を通じて、知識・技能の習得に限らず、思考力や問題解決能力の向上、多様性を受け入れる柔軟さなどの人格的な成長が期待される。

本学ではこの情勢を鑑み、早い段階から、学生が国際交流に参加し学ぶための機会を提供できるよう、国際交流センターを拠点とし、アメリカ、中国、シンガポールの高等教育機関との間で大学間交流協定を締結してきた。2013年には、看護学教育にいち早くシミュレーション教育を導入し、教育改善に取り組んでいるアメリカのサミュエルメリット大学（以下、SMUとする）と協定を結んだ。それに伴い、看護学部では、国際交流センター運営会議看護学部構成員を中心に、同大学へのアメリカ看護研修の企画・運営を進めることになった。

アメリカ看護研修は、その名称が表すとおり、看護学部独自の研修であり、本学部における国際交流事業への取り組みの中核を成す。また本研修は、保健医療福祉施設等の見学のみならず、SMUでのシミュレーション演習への参加をプログラムに組み込んでおり、参加する学生（以下、参加者とする）の主体性・当事者意識といった“activeness”（須長一幸、2010）が育まれる可能性を秘めているという特徴を有する。それ故に、本研修は、従来の海外研修から一歩進んだアクティブ・ラーニングによる研修として位置づけられ、重要視されている。本研修は、2014年度から開始されたが、当時の参加者は4名と

少なく、企画・運営はSMUとの幾度もの調整の末、試行錯誤で進められた。2015年度以降、参加者が定員の10名に達し、その運営がようやく軌道にのりはじめたところである。そこで本稿では、2015年度アメリカ看護研修の概要として、運営の実際と参加者の反応を紹介するとともに、参加者の“activeness”をはぐくむ活動について振り返り、今後の研修運営に向けた課題について検討する。

II. 2015年度アメリカ看護研修の概要

本研修は、アメリカの医療施設における看護実践の見学やSMUにおける看護教育への参加を通じて、国際的な視野で保健医療制度や看護学教育の制度、看護師の役割・実践等について学ぶことを目的に、二年次生10名の参加のもとで行われた。研修は、事前研修、現地研修、事後学修の三部から構成された。

1. 事前研修

事前研修は、12月中旬から3月初旬までの4か月間、計6回にわたり行われた。内容は、オリエンテーション、渡航指導、看護に関する講義、英会話トレーニング、スカイプセッション等であった。研修では、国際交流センター運営会議看護学部構成員、英語教員、国際交流センター職員が、それぞれの専門性を活かして指導に関わった。

看護に関する講義では、現地研修で気づきが深まるように、日米の保健医療・看護学教育制度について概要が説明された。参加者は日米の制度の違いに驚きを示したり、なぜか、とその背景を考える様子を示したりした。その一方で、関心の高まりが学修行動につながりにくい傾向がみられた。



図1 事前研修：英会話トレーニングと看護シミュレーション演習とのコラボ演習の様子



図2 事前研修：課題発表の様子

英会話トレーニングでは、事前に教材を提示し自己学修を促すとともに、自己紹介やロールプレイ等、参加者が当事者意識をもって学ぶための手法を活用した。参加者の英会話トレーニングに対する満足度は高かった。その一方で、英語でのコミュニケーションに不安を示す参加者が少なからずおり、トレーニングの回数を増やすことへの希望が寄せられた。

また英会話のトレーニングと看護シミュレーション演習とのコラボ演習を新たに導入した(図1)。これは、英語で考えを表現すること、SMUでの看護演習への適応を助けることを目的

とするもので、画像や音声等を活用して呼吸困難のある患者の状態を模し、グループで患者の状態をアセスメントして看護介入を考え、その内容を他グループに英語で伝えるというシミュレーション演習であった。参加者からは、グループで考えることの楽しさや、もっと英語で伝えられるようになりたいという学修への意欲を表す言葉が聞かれた。

最後の第6回目に、事前研修のまとめとして、参加者による日米の保健医療・看護学教育制度に関する課題発表が行われた(図2)。2グループに分かれ、各グループがそれぞれ課題テーマ

を選び、制度や背景について調べてまとめ、発表した。参加者からは、グループでまとめあげた成果に自信をもつ声が聴かれた。その一方、チームとしてのまとまりがもう少しほしいという意見も寄せられた。

その他、事前研修の締めとして、参加者は、事前・事後共通課題である質問リストを提出した。これは、事前研修での学びに基づき、現地で尋ねたいこと、明らかにしたいことについて、事前に英語で5項目の質問文を作成し、事後に回答文を記載するという課題であった。参加者は、最初はひとりよがりではなく、かつ適切な回答を得るための質問表現に苦慮していたが、教員による添削を活かし、相手に関心を寄せる表現や、オープンエンドな質問表現へとリストの修正を図った。

2. 現地研修

現地研修は、3月中旬に、11日間にわたり、SMUを拠点にカリフォルニア州オークランドで行われた。内容は、看護に関する講義、シミュレーションラボでの看護演習（アセスメント・

技術トレーニング等）への参加、急性期病院・高齢者施設・小児ホスピス等の施設の見学であった。参加者は、図の写真が示すように、生き生きとした表情で、高機能患者シミュレーターを用いた演習に戸惑いながらも真剣に取り組む、拙いながらも英語での討論に参加していた（図3-5）。

これらの現地での学びの後に、可能な限り、気づきを振り返りシートに書きとめ、互いに表現し合う振り返りの機会が設けられた（図6）。ファシリテーターは、引率教員、研修参加教員であった。学生は率直な感想をはじめ、疑問点や自分にとっての課題等を共有した。

プログラムは概ね計画通りに進められ、参加者による現地研修の満足度や達成度の評価点は高かった。特にSMU学生との交流が深まったことへの喜びの意見が寄せられた（図7）。しかし、研修時間の延長が少なからずあり、振り返りの時間がホテル帰着後の遅い時間にずれ込み、十分に時間を確保できないときもあり、参加者の中には研修中に疲れの色を滲ませ集中力が低下する者もいた。



図3 現地研修：シミュレーションラボにおける看護演習①



図4 現地研修：シミュレーションラボにおける看護演習②



図5 現地研修：シミュレーションラボにおける看護演習③



図6 現地研修：日々の振り返りの様子



図7 現地研修：参加者とSMU学生との交流の様子

3. 事後学修

事後学修は、帰国後の学びのレポートと質問リストの回答の作成・提出、学びの報告会でのプレゼンテーションであった。参加者は事前学修・現地研修での学びの内容に基づいてプレゼンテーションスライドを作成し、研修の状況、日米の文化や保健医療制度、看護師の役割等についての気づきについて、全学年の報告会参加者に向けてプレゼンテーションを行った。この報告会は次年度の研修への参加をよびかける目的を兼ねていたが、自分たちが得た経験の貴重さについて、手を挙げて追加発言をするなどの積極的な態度が認められた。その一方で、現地での生き生きとした気づきや、気づいた事象の背景についての鋭い洞察が、学びのレポートに生かされていないといった様子も見受けられた。

なお、正確には事後学修に含まれないが、アメリカ看護研修の2か月後に本学で受け入れたSMU学生の看護研修において、参加者はホストとしての役割に責任をもち、進んで受け入れの

役割を担っていた。

Ⅲ. 2015年度のふりかえりと今後の課題：参加者の“activeness”をはぐくむために

Ⅱの項で述べた研修運営の実際に基づき、本項では、参加者の“activeness”をはぐくむための課題について、チーム形成の促進、現地研修への適応の促進、気づきを学びに繋げる支援、その他の4点から検討する。

1. チーム形成の促進

2015年度アメリカ看護研修の事前研修は、参加者決定から2か月後の12月より開始された。事前研修の終盤に、機能的にも情緒的にもチームとして成り立ちつつある様子が認められたが、参加者からチームとしてのさらなるまとまりがほしいという希望が寄せられた。このことは、チーム形成にかかる期間を考慮することと、事前研修でチーム形成の促進を図るための

仕掛けが必要であることを示していると考えられる。2016年度の研修では、事前研修の開始を参加者決定直後の意欲と関心が高まっている時期とし、定期的に共に学修できるようスケジュールを調整した。また、英会話トレーニングと看護シミュレーション演習のコラボ演習では、チーム形成の促進を目的に加え、チームの一体感と目的の達成感をより得られるように、高機能患者シミュレーターを活用した実技を入れてチームでの取り組みを促す、振り返りを強化する等の工夫を図る予定である。

2. 現地研修への適応の促進

参加者が主体的に、当事者意識をもって研修に参加できるかどうかは、現地での研修への適応の程度に左右されると考えられる。2015年度、参加者は、英会話に自信が持てなかったり、SMUの高再現性の演習環境に戸惑いを見せたりした。このことは、英会話のトレーニングのさらなる充実と、SMUでの演習への適応を支援するための工夫の必要性を表しているといえる。そこで、2016年度の研修では、事前研修の回数を6回から8回へと増やし、英会話のトレーニングの充実を図っている。また、英会話トレーニングと看護シミュレーション演習のコラボ演習では、事前に英単語を自己学修するタスクを課す、SMUでの演習環境に準ずる高機能患者シミュレーターを活用するなどの工夫を取り入れる予定である。

3. 気づきを学びに繋げる支援

2015年度の研修において、参加者は、現地で豊かな気づきを得ていたが、それが事後の学びとして表現されていない現状が認められた。この背景の一つには、現地研修での振り返りの時間とエネルギーを確保しにくかったことが挙

げられるだろう。2016年度の研修では、参加者がその日その日で得た気づきをまとめ、その背景について考えをめぐらし、疑問点と解決の手段を明らかにできるように、プログラム内に振り返りの時間を確保し、また参加者が疲労しすぎないように、SMU教員とプログラム内容の調整を図ることで対応している。

4. その他

アメリカ看護研修の所要経費は、一人あたり約30万円である。残念ながら、本研修では初年度を除き、日本学生支援機構の奨学金受給支援を得ることができていない。近年の大学教育の国際化の波を背景に、全国の大学保健学分野での留学・研修者数は、2014年度で2,500名と、5年間で3.5倍に増加している（日本学生支援機構、2016）。このことは、今後、ますます奨学金受給のニーズが高まる傾向にあることと、奨学金を得るために各大学が鎬を削る中、受給に値する研修への質の改善が求められていることを意味しているといえるだろう。

研修の質の改善には、研修の成果についての評価が重要であると考えられる。本研修では、研修後に、主観的・客観的な側面から、目標に照らして総合的に評価を行っているが、いずれも短期的な評価である。個々の参加者のその後の学修態度や行動を追うと、確かに当事者意識をもって主体的に学修に取り組むという変化がみてとれるが、その長期的な効果については評価できていない現状にあり、参加者の真の“activeness”をとらえることの難しさを感じている。今後、研修の長期的評価を視野に入れて評価時期・内容の見直しを行うことを通じて、大学教育においてより魅力的で効果的な研修へと、さらなる充実を図る必要があると考えられる。それにより、奨学金の受給により参加者の

経済的な負担が減ることになり、より意欲と能力のある参加者が増え、ひいては、学生間の相互作用から生じる、“activeness”な学修態度や行動の拡がり期待できるだろう。

IV. おわりに

本稿では、本学看護学部が取り組む国際交流事業の一つ、アメリカ看護研修について、2015年度に行われた研修運営の実際と参加者の反応を概説し、参加者の“activeness”をはぐくむ活動を振り返り、今後の研修運営に向けた課題について検討した。研修運営上の短期的な課題については、2016年度の研修に対策を取り入れており、その成果の評価が待たれる。長期的な課題である研修参加者の“activeness”の評価を通して、魅力的で効果的な研修へと質を改善していくことが一層求められる。

なお、本稿における写真の掲載については、アメリカ看護研修参加者から承諾を得ている。

謝辞

アメリカ看護研修において、初年度より、

受けいれにご尽力いただきましたサミュエルメリット大学の Fusae Kondo Abbott 先生、Laurie Rosa 先生、Paul Smith 先生、諸先生方に感謝申し上げます。

引用文献

- 文部科学省 (2013年7月), 中央教育審議会 (大学のグローバル化に関するワーキング・グループ 第1回 資料5 大学のグローバル化に関する閣議決定・提言等), 最終アクセス 2017年2月2日, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/036/siryu/attach/1338083.htm
- 日本学生支援機構 (2016年3月), 各種調査情報 (協定等に基づく日本人学生留学状況調査), 最終アクセス 2017年2月2日, http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/index.html
- 須長一幸 (2010): アクティブ・ラーニングの諸理解と授業実践への課題— activeness 概念を中心に—, 関西大学高等教育研究, 創刊号, 1-11.